

平成28年度

奈良県公立学校優秀教職員  
表彰実践事例集

平成29年2月

奈良県教育委員会

# 目 次

## 【小学校】

### 学習指導の部

- 1 国語科における主体的・協働的な学習について  
奈良市立平城西小学校 教諭 藤川 由佳 1
- 2 音楽を愛する心を育て、共に学び高め合う集団をつくる「チーム東小」の取組  
生駒市立生駒東小学校 教諭 荒川 真弓 3

### 生徒指導の部

- 3 生徒指導の三機能とP D C Aサイクルの活用 ～自尊感情の向上について～  
五條市立北宇智小学校 教諭 香井 浄宏 5

### 学校体育の部

- 4 コミュニケーション力を高め体力の向上を目指す取組  
橿原市立白樫南小学校 教諭 岡島 弘泰 7
- 5 体育主任として進めた、学校全体での体力向上の取組について  
香芝市立鎌田小学校 教諭 中島 大輔 9

### 部活動の部

- 6 金管バンドクラブの指導について  
五條市立五條小学校 教諭 徳本 義和 11

### 学校教育目標の具体化の部

- 7 かかわろう つながろう ともに生きよう ～私が大事にしたいこと～  
三郷町立三郷北小学校 教諭 中村 芳司 13
- 8 ミドルリーダーとしての取組について  
下市町立下市小学校 教諭 西山 武志 15

## 【中学校】

### 学習指導の部

- 9 小中連携した英語教育の推進  
奈良市立平城西中学校 教諭 高崎 恵美 17

### 特別支援教育の部

- 10 特別支援学級の入級生に対する入学時の対応と授業実践と通常学級における特別な教育的ニーズをもつ生徒・保護者への対応について  
大和郡山市立郡山南中学校 教諭 増田 薫 19

## 【高等学校】

### 地域との協働の部

- 11 部活動を核にした地域連携と学校の活性化について  
奈良県立奈良朱雀高等学校 機械研究部顧問団  
代表 教諭 中河 克記 21
- 12 よしの調査隊における地域との連携について  
奈良県立吉野高等学校 教諭 久見 宗資 23

## 1 実践内容

これまで、「奈良県小学校教科等指導資料」や「小学校国語教材『古典に親しもう』DVD」（奈良県教育委員会）、「奈良大好き世界遺産学習」（奈良市教育委員会）などの作成に関わってきた。郷土の文学「万葉集」や世界文化遺産である「能」を題材にした伝統的な言語文化の授業づくりの研究に取り組むなど、国語の授業づくりに関する執筆を行った。



### (1) 伝統的な言語文化の学習

現行の学習指導要領では、伝統的な言語文化に関する指導の重視が挙げられている。創造と継承を繰り返しながら形成されてきた伝統的な言語文化に親しませて、我が国の言語文化を継承し、新たな創造へとつないでいくことができるようにという内容である。中学年では、「易しい文語調の短歌や俳句、慣用句や故事成語などを取り上げる」と示されている。奈良県には、『万葉集』や『古事記』や『古今和歌集』などの勅撰和歌集で触れられたり歌われたりしている素材が身近に豊富にある。そこで、中学年の指導の際には、伝統的な言語文化の学習を積極的に取り入れてきた。

具体的には、3年生の児童には、奈良にちなんだ「俳句」を、4年生の児童には、万葉集の「短歌」の学習を取り入れ、子どもたちが自然に俳句や短歌の世界に慣れ親しんでいけるように、様々な音読の工夫を行った。例えば、動作を付けて読んだり、五音七音のリズムを味わいながら読んだり、音ごとに読み手が代わる読み方をしたり、手拍子や抑揚を自由につけながら読んだりすることで、児童が主体的に学び、協働的に学びを深める機会を多く作ることを心掛けてきた。授業の中で児童と一緒に、色々な音読の仕方を考えると児童の関心もさらに高まっていったように思う。



『古典に親しもう』

DVD (奈良県教育委員会)より

また、児童に短歌や俳句の意味を理解させずに音読させることで、児童が自分の体験の中から意味を推し量り（想像し）、創造する力を育むことができた。例えば、短歌の学習で奈良県の地名が登場する短歌「よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき人よく見つ」の学習を行った際、児童が「この人吉野のこと自慢している。良い人は、ちゃんと見なさいってことかな。」と発表した。単なる音読だけでは、このような表現に行き着くことができなかつたと思われる。私自身も、児童一人一人の個性豊かな表現に触れることができた。

### (2) 昨年度の取組（「ごんぎつね」「お願いやお礼の手紙を書こう」東京書籍四年）

「ごんぎつね」の学習では、場面ごとに学習課題を設定し、学習課題について自分の考えや意見を整理する個別学習の時間を設けた。その後、グループや学級全体での意見交流を行い、一人一人が学習課題に対して視野を広げ、新たな気付きなどを得る活動の場とした。そして、再度自分と他者の考えを比較・整理し、自分の考えをまとめる活動を行った。児童一人一人が主体的・協働的に学ぶ力を育む学習活動を追究することができた。

「お願いやお礼の手紙を書こう」の学習では、社会科の学習と関連させ奈良県内の全市町村に、自分が調べたい事柄を詳しく知るため資料送付を依頼する手紙を書いた。相手に自分の要件を伝えるために手紙を出すという目的を明確にし、失礼のないように、敬体などの丁寧な表現を用いながら手紙を書いた。その後、各市町村から届いた資料を参考にして、市町村を紹介する新聞を書き上げた。最後に、資料を送っていた市町村にお礼の手紙を書いた。お礼の手紙には、資料送付のお礼だけでなく、自分が学んだことや郷土に対する思いも書き加え、自分が書いた市町村を紹介する新聞と一緒に郵送する活動を行った。この活動を通して、郷土を大切にしている各地域の思いを受け取ることができた。

## 2 成果及び課題

伝統的な言語文化の学習では、児童が興味・関心をもつ素材が重要であり、自然と古典の世界に慣れ親しんでいくような工夫も必要である。郷土奈良を意識しながら、地域に根差した教材の開発を今後も続けていきたい。

「ごんぎつね」の実践では、「課題作り・話し合い・自分の考えの深まりを得る」という学習形態を計画的・継続的に取り組むことで、児童自らが個別学習に取り組み、進んで発表したいという意欲につながったように思う。また、児童一人一人が課題を解決するために深く思考したり、言葉を手掛かりに判断したりすることの重要性を改めて感じることができた。

「お願いやお礼の手紙を書こう」の実践では、実際に奈良県内の全市町村に依頼の手紙を送付し、ほぼ全部の市町村から返事が返ってきた。児童は、自分たちの学習に沢山の方が協力していただいているという思いに感激し、送られてきた複数の資料から必要な情報を精選し、懸命に新聞を書いている姿が印象的であった。また、そのようにして書き上げた新聞のコピーでも良いので、自分の手元に保存しておきたいという児童が多数見られた。郷土に対する思いがより深まった。

今後も国語科のみならず、各教科等における習得・活用・探究の学習過程全体を見渡しなが、次期学習指導要領で重要視されているアクティブ・ラーニングの「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」の三つの視点に立って学び全体を改善することを考えていきたい。また、子どもたちが各教科等の内容的な理解を深めながら、育成すべき資質・能力を身に付けていけるように研鑽を積んでいきたい。

## 3 その他参考となる事項

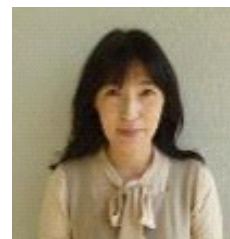
参考文献『小学校四年 新しい国語の授業』（東洋館出版社）

音楽を愛する心を育て、共に学び高め合う集団をつくる「チーム東小」の取組

生駒市立生駒東小学校 教諭 荒川 真弓

1 実践内容

数年前、集会で話を聞く態度や授業中に落ち着きがない子どもの姿が多く見られた。子どもたちを変えていくにはどうしたらいいのか非常に悩んだ。音楽専科として子どもと関わることのできる授業を大切に、もっと質の高い授業にしなければならないと考えた。そこで、音楽学習を通して、心を育て、なかまとのつながりを大切に、共に生き生きと学び高め合う子どもの姿を目指した。本校では目標の一つに「音楽を愛する心を育てる」を掲げ、子どもが自尊感情をもてるようになる「音楽の力」を信じ、子どもの「生きる力」を育むことを目指して学校全体で取り組んでいる。



(1) 人を育てる ～学習活動の中で～

合奏、合唱の取組は集団の中で支え合うことから始めている。「よく聴く」「なかまと共に」「一生懸命」「くつや椅子をそろえる」「あいさつをする」「人や楽器などの物を大切にする。」「遊びと学びの違い」など、当たり前のことを丁寧に学習活動の中で気付かせながら人としての成長を促すように取り組んでいる。

(2) 全校で取り組む音楽活動 ～音楽集会・音楽会～

全校で一つの音楽をつくる体験を通して協働する喜びを感じさせると同時に、家庭や学校生活の中に音楽を定着させたいと考えた。音楽集会では、低学年が高学年と歌うことで低学年の授業では感じることのできないハーモニーを体感させることができ、低学年の子どもたちにとっては、豊かな音楽体験の一つとなっている。音楽会では、他学年の良さを認め、学び合いながら、なかまと共に力を合わせ一つの目標が達成できたという体験や感動が、子どもたちの感性を育て表現力を高めている。また、音楽会に地域の老人クラブの方を招待することで、地域や保護者の方に小学校の音楽教育を理解し協力してもらえる最良の機会となっている。

(3) 交流授業で学び合い ～あこがれの高学年に～

学校全体の音楽の活性化に向けて、高学年には低学年にも関わりをもつように取り組ませている。その一つに高学年と低学年の交流授業を設定している。高学年は低学年に音楽の楽しさを伝えようと意欲的に学習に取り組み、低学年は高学年の響きある声や演奏にあこがれ、音楽の楽しさ、すばらしさを学んでいる。



- |                         |                  |
|-------------------------|------------------|
| 1年生と4年生・・・はじめまして出前コンサート | (歌、ハンドベル、リコーダー)  |
| 音楽物語「11ぴきのネコ」           | (歌、せりふ、グループ合奏)   |
| 2年生と6年生・・・スプリングコンサート    | (歌、リコーダー、箏合奏)    |
| 3年生と5年生・・・リコーダー出前コンサート  | (歌、リコーダーのミニ先生体験) |

#### (4) 歌声づくり・音楽の体現化 ～授業づくりの工夫～

低学年は担当学年ではないが、朝の学習の時間に全校音楽の曲を指導したり、音楽会の指導時期に入り込みとして発声指導をしたりしている。このように音楽を「楽しむ」基礎となる「歌声づくり」など表現技能を高める工夫や、心で感じたことをのびやかに体現化できるように体を使った表現を体験させる工夫をしている。6年生では3学期に小学校最後の音楽学習のまとめとして、リーダーを中心に合奏や合唱を作りあげていく。思春期の入り口にさしかかった子どもたちに、合唱に合わせてダンスを創作させる。今までの経験の中で思いを体現化してきた積み重ねもあり、最後にはクラス全員の心を一つにして心弾む音楽を表現できる。

児童の主体的な活動として4年生では「音楽物語」、5年生では「東小太鼓（和太鼓創作）」などのグループ活動による創作活動にも取り組んでいる。



#### (5) ゲストティーチャーから学ぶ ～地域とともに～

音楽を身近に感じ、音楽の楽しさを体感、実感できる機会として箏・和太鼓体験学習、バイオリン・金管アンサンブル・ゴスペルコンサートなど地域のゲストティーチャーを招いて、生の楽器の音色や歌声、日本の伝統文化に触れさせている。音楽を楽しむ、「音楽の力」を伝える活動を積極的にされているゲストティーチャーの方々との出会いが、子どもたちの宝となり、音楽の魅力をより感じさせることのできる機会となっている。

#### (6) 学級担任との連携 ～チーム東小～

連絡ノートなどを活用し、「子どもを共に育てる」という共通理解のもと、全職員が協力、連携して指導している。また、教室でも歌唱や器楽の練習ができるように、CDを各クラスに配布している。音楽会や集会では、教師集団自ら音楽に親しむ姿を子どもたちに示し、学校全体で音楽を通して一つになる楽しさを感じさせている。

## 2 成果及び課題

教師集団の連携指導と協力の成果として、子どもたちの集会や授業での聞く（聴く）態度は少しずつ改善され、目標をもって自主的に取り組むことができる子どもが増えてきた。子どもたちが自ら学ぶ意欲をもち、なかまと共に目標を明確にし、本気で取り組むことができれば、質の高い学習活動を展開することができると確信した。また、取組を継続することによって、各教室から歌声や楽器の音が聞こえてくるようになり、音楽を通して子どもの笑顔に出会えることも増えてきた。

課題として、多種多様な子どもの実態に寄り添いきれず、十分に心を開くことができない子どももいる。なかまと共に取り組む喜びを感じさせながら、集団の質を高いものにすることを目指し、今後も子どもの実態に沿った教材や指導の研究に取り組み、教師集団一丸となって進めていきたい。

## 3 その他参考となる事項

生駒東小学校ホームページ <http://www.ed.city.ikoma.nara.jp/>

1 実践内容

昨年度・今年度と担任した学年は、入学時から課題の多い学年で、毎年多くの教員が携わり、学校全体で指導にあたってきた集団である。特に一昨年度は児童と教員のコミュニケーションがうまく取れなくなり、関係機関の支援を必要とする状況であった。また、学力的にも担任一人では授業を円滑に進めることも難しい程であった。



昨年度の1学期はまず「クラスマネジメント」に力を入れた。2年生で担任していたこともあり子どもたちとのコミュニケーションは、4月当初から比較的良好であったが、子どもたちからは学校に対する不信感や自分に対する自信のなさがうかがえ、何事にも消極的であった。

子どもの意識を高めることができれば学級が変わる、そしてその意識の基盤を築いているのが自尊感情だと考えた。そこで、自尊感情の向上のために重きを置いたのが「生徒指導の三機能」と「P D C Aサイクル」の活用である。

三機能とは、「自己決定の場を与える」「自己存在感を与える」「共感的人間関係を育成する」という流れをもち、自己指導能力の育成を図るためのものとされているが、自尊感情の向上にも適していると考えた。自分で決めて実行したことを評価されることで自信をもつことができ、また互いに認め合うことで人に尊敬の念をもつこともできる。また、その流れをもった活動を、ルーティン化されたP D C Aサイクルの上で実行すると、子どもたち自身で互いに自尊感情を高め合うことができると考えた。

これらの実践のために設定した場が、「自主学習」と「奉仕作業」である。どちらの活動も自主的に行うべきものなのだが、子どもたちに全てを委ねてしまうと、活動のイメージをもつことすら難しくなる。そこで、スムーズに取り組めるよう担任が環境やシステムを整える必要があった。以下がその流れである。

(1) モデルロールの提示・計画・実行 (P l a n・D o / 自己決定の場を与える)

まずはモデルロールの提示である。手本を示すことで子どもたちはイメージをつかみ、自分で一週間の計画を立てることができる。また、手本どおりにすることで確実に教師から評価され、次の自主的な活動につなげることができる。

(2) 評価・自己評価・振り返り (C h e c k・A c t i o n / 自己存在感を与える)

評価は子どもたちを随時観察し、個々にあった内容で自己存在感を感じることができるようになる。また学校全体の共通認識が重要で、担任以外から褒められる機会を設けることで、子どもたちは喜びや達成感をより味わうことができ、意欲や自主性の向上にもつながる。

日	時間	活動	振り返り・感想
月	8:10-8:25	朝の挨拶	★☆☆☆☆
火	10:30-10:45	教室	★☆☆☆☆
水	先生の休み	先生の休み	★☆☆☆☆
木	かいたん	先生の休み	★☆☆☆☆
金	黒板	先生の休み	★☆☆☆☆
土・日・祝		家	★☆☆☆☆

活動後はシートに自己評価と振り返りをさせる。振り返りは自分へのメッセージや

アドバイスを書かせ、メタ認知や活動の改善につなげる。また、そのメッセージに返答する形で担任からの評価も行う。

(3) シェア（共感的人間関係を育成する）

個々の「がんばり」を伝え合う場を設けたり、友だちの良いところをメッセージカードにして伝えたりする活動を行う。これは互いに認め合ったり、競争心や向上心を育んだりする場となる。



昨年度はこの活動を通年行うと共に、取組について職員会議で報告し、全教職員の理解と協力を得て子どもたちの内面からの変容を試みた。

## 2 成果と課題

子どもたちは何事にも落ち着いて取り組むことができるようになった。それに下級生が本学級の真似をし出すなど、学校全体の規範意識にも良い影響を与えている。またQ-U（学校における児童生徒の意欲や満足度を把握する調査）の結果では、6月は20%の児童が学級生活不満足群だったのが、12月にはそれが0%となり、全体の95%が学級生活満足群に移行した。これは互いに認め合うことができているからで、自尊感情の向上の裏付けとも言えるだろう。

しかし、これはまだ子どもの基盤づくりの段階である。本年度も、この活動を発展・継続しながら、学力や社会性を向上させる取組を学校全体で行っているところである。この取組が実を結び、子どもたちの自尊感情が向上した状態で平素の学校生活を送ると、児童や学校はどのように変化していくのか、楽しみなどところである。

## 3 その他参考となる事項

北宇智小学校ホームページ <http://www.gojo-nar.ed.jp/kitasho/>

## 1 実践内容

### (1) 児童の実態と取組のねらい

近年、子どもたちを取り巻く多種多様な生活環境によって、子どもたちの体力低下や運動する機会の減少が危惧されている。本校のある白檀町は高齢化率が非常に高く少子化が進み、友だちとの帰宅後の外遊びや社会体育の場がなくなりつつある。そのような中で、自分の考えを相手に伝え、ともに協力して行動する力に欠ける児童が多い。体育の学習は、教室での他の教科学習に比べ、子どもたちの本音のコミュニケーションの場がたくさんあり、その場その場で、お互いの意見をぶつけ合いながらたくましく成長できる機会である。そこで本校では、体育学習を中心として、児童のコミュニケーション能力の育成を目指したいと考える。体育の学習では、「ゲームで勝ちたい。」「この技ができるようになりたい。」など一つの目的に向かってコミュニケーションを取りながら進めていくことができる。ゲーム形式の活動の中で、一人一人が考えをもち、伝えあう場面を設定することで、児童が互いの思いを共有しあい、ともに伸びていこうとする意識を育てたい。各学年、年間計画の中でボール運動やゲームの領域では、合同体育の時間を設定し、発達段階の違う異学年と関わりあうことで互いを尊重し、多様な人間関係を作っていくことができると考える。児童が互いを認めあい大切に思えるような活動をしかけることで、コミュニケーション力（自分の考えを伝える・お互いの考えや気持ちを理解する力）を付けていきたいと考える。



### (2) 体育授業での取組

S F F（白檀南フラッグフット）を楽しもう！ 5・6年合同体育

#### ① オリエンテーション

今回、ボール運動に関する合同体育は、初めての取組である。どちらかといえれば自分の意見や考えを伝えることが苦手な6年生と、聞くことが苦手な5年生がしっかりとコミュニケーションをとり、ゲームを行っていくことをテーマとした。

#### ② ドリルゲーム&タスクゲーム

基本的な動きや作戦を例示し、チームの特長を生かす練習や作戦を選び、話合いの時間を確保しながら取り組んだ。体育の授業である以上運動量も重要となるため、動きながらコミュニケーションをとることをすすめ、運動量の確保を行った。タスクゲームを通じて、児童はパス中心なのかラン中心なのか自チームの特性にあった攻撃の仕方を考えながら取り組んだ。



### (3) S F F リーグ戦&対抗戦

チームの中で児童は作戦を相談しながらゲームを進め、その中でお互いにコミュニケーション（チームの中での合言葉や友だちに対する声かけなど）を取りながら、力を合わせてタッチダウンを目指すことの楽しさを味わわせることを中心に指導を進めた。また、チームの中の作戦で一人一人の役割を大事にすることや、ゲーム中の声かけや互いに励まし合うことといった、全員が笑顔で気持ちよく取り組める雰囲気づくりを行った。

リーグ戦ではルールづくりを中心に、対抗戦では作戦を考えることを中心に取り組んだ。児童は基本のルールに自分たちの考えたルールを追加しゲームを行った。5・6年の枠を取り払い、積極的に意見交換を行う姿がたくさん見られた。1回戦総当たりのリーグ戦を通して白樫南オリジナルルールが確定した。そして、リーグ戦の順位の下位のチームから対戦相手を指名し、対抗戦を行った。対抗戦では、前半と後半の間のハーフタイムの時間を有効に活用し、自分たちの特長に加え、相手の特長もとらえ後半に修正できるチームが増えてきた。

## 2 成果と課題

5・6年合同体育「フラッグフットボール」の実践では、振り返りカードや授業後の感想を見ると、どの児童もフラッグフットボールを楽しみ運動に親しむことができたと思う。特に、ボール運動が嫌いと事前アンケートに消極的な意見を書いていた児童が、作戦を考えるチームの話合いではリーダー的な役割を果たしていた。また、ボール扱いが苦手な児童も、ドリルゲームやタスクゲーム



を通して、パスを受けて、ボールを持って走るという基本的な動きを身に付けることができ、タッチダウンを決めるなど、積極的に参加して活動を楽しむことができた。その要因となったことは、単元を通して、チーム内でのコミュニケーションを大切にしながら取り組んだことである。運動に自信がなく消極的な児童は、「どんまいどんまい！」とか「OK、ナイス」等の声をかけてもらうことでどんどん積極的にフラッグフットボールに参加することができた。また、自己中心的に自分の運動能力だけでプレーしていた児童も、自分がおとりとなってボールを持ったふりをして走り、敵をひきつけ味方がタッチダウンを決める作戦がうまくいくと自分のことのように喜んでチームの雰囲気がよくなるということも多々見られた。また、4コート作成して、セルフジャッジでゲームをすすめたが、ルールづくりの段階からしっかり話合いが行われていたため、判定でもめたり中断したりすることもなく、スムーズにゲームが行われ、児童の運動量もしっかりと確保できた。さらに、この取組で、3学期のサッカーの授業においても、ゲームとゲームの間の時間に、自分たちで作戦タイムを設けて話合い活動を積極的に行い、後半戦に成果を出すことができていた。振り返りカードに、友だちからの温かい声かけやアドバイスがあるといつも以上に体が動き、失敗を恐れず積極的に活動できるという意見が多く書かれていて、なかまとのコミュニケーションが、体を動かすことに大きな影響を与えるということを実感した。

## 分野番号3 小学校 学校体育の部

### 体育主任として進めた、学校全体での体力向上の取組について

香芝市立鎌田小学校 教諭 中島 大輔

#### 1 実践内容

本校に赴任して3年目（平成18年度）から、体育主任を務めることになり、本校児童の体力面の課題を解決していくために、体育科授業や体育的行事、休み時間等を利用した体育的活動の工夫と充実に努めてきた。本校は開校当時から、体験的な学習を通して豊かな人間性と確かな実践力を育む教育を進めている。特に栽培活動が盛んで、力を入れている。そのような中で、体を動かすことの楽しさを感じられる児童を育成し、結果として体力向上につながるよう、職員の理解を得ながら、体育主任として取組をリードしてきた。



##### (1) 体育的活動の充実

学校全体として、体を動かすことが好きな児童、休み時間に積極的に運動する児童を増やし、さらに活気のある学校にしたいと考え、全校での体育的活動の工夫と充実を図った。

##### ① リズム縄跳びの開始【H19～】

体力テストの結果から、本校児童の跳ぶ力に課題があることが分かり、3学期の全校朝会では全校で縄跳びを毎週行うことにした。音楽に合わせて約5分間決められた跳び方で跳ぶ。運動場には手作りのジャンピングボードを設置すると、子どもたちに大人気となり、休み時間に縄跳びをする児童が大幅に増えた。

##### ② 水泳教室の開始【H20～】

25mを泳ぎ切れない5・6年生児童を対象に参加を募り、夏休みに水泳教室を始めた。教員の大半が指導にあたり、少人数指導の効果的な教室になった。

##### ③ 外遊びタイムの開始【H21～】

運動の二極化が問題視されてきたが、本校でも同様で、休み時間に外へ全く出ず、体を動かさない児童が見られた。そこで、毎週火曜日の業間休みには、必ず運動場に出て遊ぶことにし、学級遊びや自由遊びを行った。体を動かすことの楽しさを感じるきっかけとなるよう、運動委員会から遊びの紹介等を行ってきた。

##### ④ マラソン大会の復活【H23～】

赴任前から本校では道路事情の変化のため、マラソン大会がなくなっていた。かけ足は行ってはいたものの、児童には明確な目標がなく、意欲的にかけ足に取り組むのが難しいようであった。そこで、コースの設定など大きな労力を要したが2年がかりの準備で実施に漕ぎ着けた。近隣校の体育主任からの情報や保護者の協力を得て、マラソン大会を盛大に復活できたのは、体育主任としての自信にもつながった。



## (2) 体育科授業の充実

平成21年に県でも体力向上が教育課題の一つとなっていた。そこで、体育主任として本校児童の体力向上を見据えた体育科授業の充実を目指した。

### ① 子どもの体力向上指導者養成研修（独立行政法人教員研修センター）【H21】

長野県にて計4日間の研修に参加。主にゲーム・ボール運動領域の研修を行った。その後、伝達講習の講師を数回務め、体育科の授業づくりについて研鑽を積む機会を得た。

### ② 市・県の小学校体育研究会での授業研究や実践発表【H21・24】

ボール運動ゴール型「タグラグビー」と「ハンドボール」の授業公開、実践発表を行った。ルールの簡易化と場の工夫によって、身に付けさせたい動きを引き出すことを目指した。



### ③ 保健体育課の体力向上推進コーディネーター【H25・26】

県立教育研究所に勤務し、県内の小学校へ赴き出張授業や職員研修を行ったり、多くの講座や実技講習会を行ったりする中で、学校体育の充実や体育科の授業づくりをより詳しく研究する機会を得た。また、県内の小学校に配布しているDVD（明日から使える体育学習「体力向上モデルプラン集」）や資料（エンジョイ！ラン&ジャンプ！「走・跳の運動事例集」）の作成にも携わった。

2年間勤務した後、再び本校に戻り、経験を生かして特に最近増えてきている若手教員に体育科の授業づくりを伝えることに努めている。

## 2 成果及び課題

体育主任を務めてから10年が過ぎるが、始めてきた様々な取組が、本校の教育活動の中にしっかりと位置付いている。全校での大きな取組だけでなく、体育授業や体育的活動における細かな考え方や実践が確実に広がってきているのも実感している。運動場で遊ぶ児童が増え、体力テストでの県平均を上回る項目の割合が増えるなど、目に見える形で成果が表れてきている。しかし、本当に運動好きな子どもを育て、生涯にわたって運動を楽しむ資質が身に付いているかどうかの検証が必要であり、今後は更に体力テストの結果を分析し、本校児童の課題を克服するような取組を進めていく必要がある。そして、体力向上推進コーディネーターという貴重な経験を生かし、より充実した体育科の授業を校内外に広めていきたいと考えている。

## 3 その他参考となる事項

香芝市立鎌田小学校ホームページ

<http://www.city.kashiba.lg.jp/eschool/category/22-7-0-0-0.html>

県立教育研究所ホームページより なら“先生の蔵”～授業のための教材・教具集～  
体育・保健体育 <http://www.nps.ed.jp/nara-c/gakushi/kura/>

金管バンドクラブの指導について

五條市立五條小学校 教諭 徳本 義和

1 実践内容

五條小学校の金管バンドクラブは、1984年のわかさ国体が開催される年に創部された伝統あるクラブである。以前勤務していた学校で金管バンドの指導を始め、人事異動で4年間バンド指導からは離れていたが、バンド指導をしたいという強い思いがあり、本校着任以来、金管バンドクラブの指導をしている。



学校の実情等も加味し、初年度からバンド運営の改革を図り、「感動を与える音楽」をテーマに取り組んできた。

まず改革の手始めに、練習時間の確保に取り組んだ。本校では、異学年、同じ地域での児童同士の交流を活性化させるためにも、昔から分団登校を続けている。その体制を崩さないように、毎週火曜日・木曜日・金曜日の3日間、午後4時から4時45分までを練習時間とすることにした。当初、まずは大きい音を出せるようにと、基礎練習に明け暮れる毎日であった。しかし、子どもたちにとって基礎練習は退屈で楽しくない練習であり、モチベーションが下がることもあった。運動会等の学校行事で金管バンドが演奏する機会があるので、行進曲や校歌等の伴奏の練習を開始すると、モチベーションも上がり楽曲も何とか通せるようになり、本番を迎えることができた。しかし、指導者からすると「音を大きく出せていない。」「演奏がいまいちまとまらない。」などの課題が見えてきた。子どもたちと指導者の間で、バンド活動に対する意識の差があるように思った。そこで、演奏する曲の参考音源と自分達の演奏を録音したものを聞き比べさせたり、バンド指導の先輩の先生に直接指導してもらったりして、『こんな音をだせるようになる。』という目標をもたせた。始めは、「これは無理。」「自分達はこの演奏している人とはレベルが違う。」などのネガティブなイメージをもち、モチベーションが上がらない時期があったが、反復練習を繰り返し、何度も伝えることで少しずつであるが、「できるようになってきた。」と子どもたちが実感するようになった。

本校でバンド指導を始めて2年目、奈良県小学生バンド連盟より、2013年、2014年の「全国小学校管楽器合奏フェスティバル 西日本大会」への出場の機会をいただいた。この舞台に出演することは子どもたちにとってももちろん嬉しいことであるが、西日本各地から集まる小学校の演奏を聴くことは、子どもたちにとってとても良い刺激になり、子どもたちの意識が変わっていくのを感じた。2015年には「2015 JAPAN BAND CLINIC」の小学校指導者講座のモデルバンドをさせていただき、たくさんの指導者の前でプロの先生による指導を受けたことで、さらに子どもたちの自信が高まっていた。今年、「全日本小学校金管バンド選手権」の音源審査を通過し、12月23日に行われる全国大会に出場する。

たくさんの舞台を経験することで、たくさんの方々に子どもたちの活動を知ってもらえるようになった。今では、日々子どもたちを見守ってくださる地域の方々へ感謝の気持ちを込めて、毎年3月には地域の商業施設の土地をお借りして「ふれあいコンサート」

を実施したり、老人ホームの落成式での演奏、自治連合会主催の「ふれあいの集い」等で演奏させていただいたりしている。このような取組は、学校の様子を知っていただくだけでなく、“地域の子どもを地域で育てる。”という思いにもつながっていると思う。



また、毎年夏休みには、同じ活動をしている子どもたちとの仲間作り、バンドのレベルアップをねらいとして市内の野原小学校との合同練習を実施している。昨年度からは、宇智小学校も参加している。合同練習では、複数の指導者から多様なアドバイスを受けることになり、子どもたちの視野は広がり、多様な感覚をもつことになる。さらに、市立体育館竣工行事として奈良フィルハーモニーや中高校生と共に演奏する『五條市バンドフェスティバル』を市教育委員会が企画してくださった。今年の夏休みに、1回目の合同練習を五條高校で行った際、200人を越える人数の音に子どもたちは圧倒されると同時に、生き生きと活動する様子が見られた。

バンド指導では、音楽の楽しさを体験させることはもちろん、子どもたちは一生懸命取り組むことで、努力することの大切さを感じ、しんどいことにへこたれずに挑戦し続ける忍耐力が養われ、それらを継続したことで『できた喜び』をたくさん味わってきた。努力したことで味わった喜びは、自尊感情の高まりにつながっている。音楽活動に特化した力だけでなく、子どもたちの実生活に必要な力をバンド活動で育て、社会に出たときにしっかりと自己主張をできる人間に育てて欲しいという思いを持ち、今も指導にあたっている。

## 2 成果と課題

- (1) 演奏技術が上がるにつれ、子どもたちも自信をもって取り組むようになってきた。それに伴い、各方面からの出演依頼も増え、結果的に五條小学校金管バンドクラブの活動がたくさんの方々を知っていただけるようになった。応援やお褒めの声をかけていただくことは、子どもたちのやる気を奮い立たせる良いきっかけとなっている。
- (2) 金管バンドクラブに所属する子ども達が、各クラスでも模範となり学校全体の規範意識の向上につながっている。また、全校児童の前で演奏を披露することにより、メンバーの自尊感情の向上、他の子どもたちの『あこがれ』的な存在として、一生懸命取り組む気持ちをもつことを促すきっかけとなっている。
- (3) 他校との交流をする中で、良い意味での競争心を喚起し、五條市のバンド活動、音楽教育の活性化につながっている。また、保護者の方々が、他校の練習の様子を見たり演奏を聴いたりすることで、バンド活動に対する期待が高まり、活動にもより積極的、協力的になってきている。
- (4) 五條市の音楽をやりたい子ども達に、どのように機会を与えていくか。他校との連携をより一層深めて、より質の高い指導ができる体制を作っていきたい。
- (5) バンド指導と聞くと、特別な技術が必須だと思われがちで、バンド指導に取り組んでくれる人員が少ないのが現状である。指導人員の確保、育成が課題である。



## 3 その他参考となる事項

五條市立五條小学校のホームページ

<http://www.gojo-nar.ed.jp/gosho/>

## 1 実践内容

三郷北小学校では「かかわろう つながろう とともに 生きよう」というスローガンをもとに、様々な個性・特性をもつ児童がそれぞれに力を付けつつ、周りの児童との関わりを大切にして社会性も育み、共に生きる教育を進めている。



### (1) 組織・体制づくり

個別の支援計画をもとに学級担任と特別支援学級担任が相談し、できる限り学級の中で取り組める教材の工夫をしている。この実践で求められることは、保護者、児童の願いを大切にして学校・保護者が同じ方向を向いて共通に理解し、信頼関係を築くことである。奈良県特別支援巡回アドバイザーに訪問していただき、週に一度、特別支援担当者会議を開いている。この会議によって、教師の不安を減らし、自信をもって教育を進めることができている。

### (2) 学校・学級経営で大切にしたいこと

私は、どのようにすれば特性のある児童と周りの児童が深く関わり合うことができるのかを常日頃考えている。そのことが、いずれ互いのつながりを深め、支え合えるなかま作りに通じると考えるからである。その児童だけでなく、周りの児童を育てることも大切だと感じる。互いを理解し、しんどい時にしんどいと言えたり、しんどいと言えない児童に寄り添える児童がいたりすることが安心して学校生活を送る母体となる。周りの児童がその児童の学習や生活の様子を知っていくことが共に生きることにつながる。

### (3) Aと関わり合う中で互いに育ってきたこと

4月当初、特別支援学級在籍児童のAが教室のベランダに出ていたり、学習をしていなくても学級児童の大半は「Aさんやから」という理由で何も注意をせず、当たりさわりなく接していたので、Aと関わり合うのは教師が多かった。そこで、私は「優しく関わるのは悪くないが、危険があったり、やらなければならないことがあるときはもっと励ましたり、声をかけたりするべきや。もっとなかまのこと考えていこう。」と話をした。私は同じなかまとして、同じ目線で関わってほしいと感じていた。そのため、外に遊びに行く時や、移動する時間、グループ学習等では、Aに対して教師がずっと直接支援するのではなく、周りの児童と関わらせて間接的に支援する場面も取り入れた。数か月が過ぎた今では、周りの児童が様々なことでAに話しかけたり、「先生、Aさんイライラしてまた蛇口



で水出したから拭いといたで。」と私に報告する児童がいたりしている。また、Aは自分のやりたくないことがあると、だれかに「～やろう。」と言われても、嫌がって相手を押すことがある。最初は「Aさん押してくる。」と私に相談する児童がいたが、今では、「いらんねんな。じゃ、後でしょうか。」「いまやりたいこと終わったらやろうか。」等、Aがいろいろなことを取り組みやすい話し方や接し方になってきた。Aも最初は友だちの話の聞かなかったり、こだわりが強く、次の学習に進めなかつたりしていたが、徐々に自分なりに納得して切り替えがうまくなってきた。関われば関わるほどお互いが育つので、これからの児童たちのつながりが楽しみである。



## 2 成果及び課題

インクルーシブ教育を進める中で教師間、児童同士のつながりが深まり、学習面、生活面で良い面がたくさん見受けられている。学級担任・特別支援学級担任が教室にすることで、Aだけでなく学級にいる支援を必要とする児童のサポートが効果的に出来ているのもその一つである。

しかし、課題もある。その一つが特性ある児童に対する専門的知識や環境の不足である。教職員研修も行われているが、まだまだ学ばなければならないことが多い。目まぐるしく移り変わる教育の中で、教師一人一人が立ち止まって振り返りながら進んでいくことが大切だと感じる。他にも人員確保の厳しさや体制作りなどの課題はあるが、教師はまず一人の人間として、その児童に寄り添ってつながっていくことが大切だと感じる。それが、周りの児童とその児童とのつながりにもなる。その児童と周りの児童が、お互いに存在を認め、個性・特性を理解していき、支え合えるなかま作りが、その児童の「地域で育ち、地域で生きる」土台になると感じている。

## 3 その他参考になる事項

三郷町立三郷北小学校ホームページ <http://www1.kcn.ne.jp/~sankita1/>

## 1 実践内容

今日の学校現場においては、団塊世代の退職期を迎え、新規教員が大量に採用される時期となっている。このような状況下、ミドルリーダーとしての中堅教員の役割が非常に重要になってきている。世代構成に偏りが見られる中、ミドルリーダーは、学校の教育目標や管理職のビジョンを理解した上で、その具現化に向け提案したり、教員間の意見を調整したりしながら、教員それぞれがもつ情報や知恵、意見を集約して、学校運営に円滑に反映させていくことが大切である。さらに、日常的なコミュニケーションを通して、経験が豊かな教員と少ない教員とのパイプ役を果たしながら、ミドルリーダーが担っている役割を自覚し、学校運営に寄与できる取組を進めている。そして、パノラマ的に学校運営を見渡し、学校長の経営ビジョンをより具現化し、教頭を補佐していく取組を進めている。



また、各取組が円滑に進むように担当分掌を決め、チームとしての取組の推進を促した。

### (1) 学力向上への取組

- ① 町教育委員会の学力向上委員会方針を受けて、学力向上プロジェクトを組織した。その中で、本校の課題をとらえながら考察を行い、解決に迫る具体案を管理職及び教員に提案した。
- ② 課題の把握にあたり、県学力テスト（4年生）、全国学力テスト（6年生）の分析を行い、校内職員研修において課題を共通理解し、具体的改善に向けての提案を行った。
- ③ 課題解決を目指す上で重要であるととらえた家庭学習の習慣を定着させるため、「家庭学習の手引き」を作成し、各家庭に配布した。
- ④ 朝の時間（業前時間）の充実を図る上で、これまでの朝の読書の時間を10分間繰り上げて開始することとし、従来の朝の読書時間を「きららタイム」として、課題解決に向けた一方策とした。

		月		火		水		木	
第1・3・5	8:10～20	教師 職朝/ 体育館	児童 体育館へ 移動	教師 職朝/ 見回り	児童 読書	教師 職朝/ 見回り	児童 読書	教師 職朝/ 見回り	児童 着替え
	8:20～30	全校朝の会		きららタイム (発声)		きららタイム (学習・国語)		きららタイム (体力作り)	
担当分掌	教務部・生徒指導部 放送委員会			学力向上PT		学力向上PT		保健体育部	
第2・4	8:10～20	職朝/ 活動場所	移動	職朝/ 見回り	読書	職朝/ 見回り	読書	職朝/ 見回り	着替え
	8:20～30	全校活動		きららタイム (発声)		きららタイム (学習・国語)		きららタイム (体力作り)	
担当分掌	特別活動部			学力向上PT		学力向上PT		保健体育部	

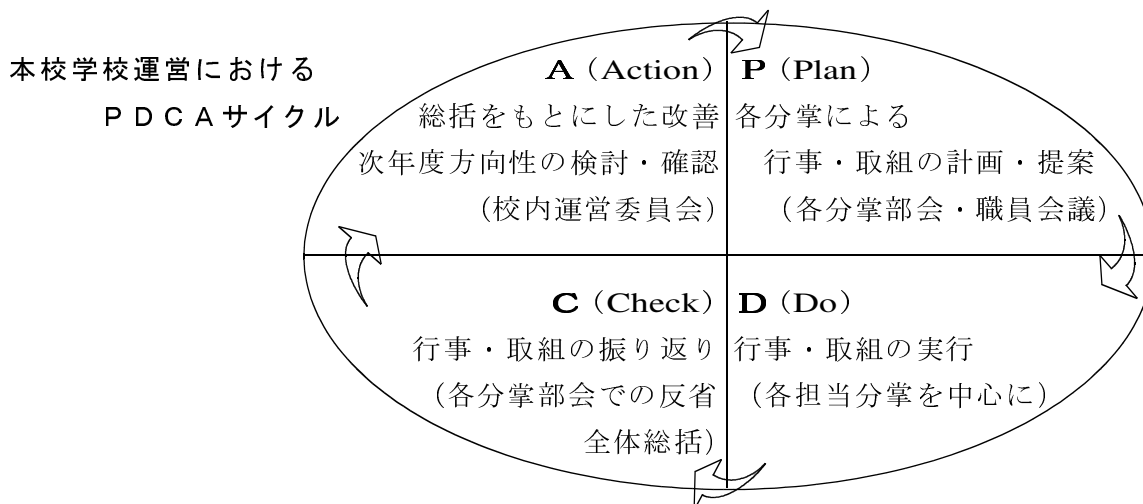
- ⑤ 学習規律や学習指導についても検討を行い、本校版の「基礎学力を高めるために大切にしたいこと」を作成し、全教員による共通理解を図った。

(2) 小中連携（小中一貫）教育に向けた取組

- ① 町教育委員会による研究指定を受け、小中連携に関わる協議を行い、中学校教員と共に情報交換、意見交流などを通し、より効率的な連携の在り方を探った。
- ② 新たに連携のための行事を作るのではなく、小中ともに今ある行事を効果的に活用する方策を探った。「無理のない」相互連携を進めることを念頭においた。

(3) 評価に関わる総括の分析と結果を活用した学校運営に向けた取組

- ① 各総括項目について全教員が学校内評価を行い、数値化しながら明確化を図った。
- ② 反省や課題を記入するだけでなく、それに対する改善案を記入することにした。
- ③ 年度末に反省等を一括して記入する方式から、年間を通して日常的に記入できる方式に改めた。
- ④ 管理職、各主任が参加する校内運営委員会をもち、教員から出された課題や改善案をもとに来年度に向けての取組を協議した。P D C Aのサイクル化を重要視して、取組を進めた。



## 2 成果及び課題

学力向上に関わって、学力向上委員会の方針や学校の教育目標を踏まえた提案を行うことで教員の学力向上への課題意識を高めることができた。また、教員からの様々なアイデアを受けとめることができ、アイデアや意見を次の提案に生かしていくという一つのサイクルができつつある。

小中連携（小中一貫）教育については、中学校における指導実態を知ることによって、教員が学習指導や生徒指導面において小中学校9年間を見据えた指導を強く意識するようになった。児童生徒だけでなく、教員間のスムーズな接続を目指した取組を今後も検討していきたい。

総括方法を改善することで、教員の学校運営に対する積極的な参画を促すことができ、多くのアイデアを学校運営の改善のために生かしていくパターンが広がったと捉えている。さらに、学校運営に自らのアイデアが生かされることで、さらなる参画意識が促されている状況も見られる。

今後、ミドルリーダーとしての責務でもある教員間の調整を進めながら、ベテラン教員がもつ多くの経験やすばらしい知恵を、若手教員に伝承していく取組を一層進めていきたいと考えている。

## 1 実践内容

平城西中学校区には、右京小学校と神功小学校の2つの小学校があり、施設一体型ではない連携型の小中一貫教育の取組を進めてきた。施設は離れているが、小中合同授業や小小合同授業など様々な取組を行っている。

平成26年度に4年計画で文部科学省より英語教育強化地域拠点事業の指定を受け、ここ数年で本校区の英語教育は劇的な変化を遂げてきている。「互いを認め合い、生き生きとコミュニケーションする子ども」を目指して、小学1年生から中学3年生まで9年間の系統立った教育課程と指導、また中学校における指導内容の高度化を図ることを小中共通の主な研究として進めている。



### (1) 平成26年度

#### ① 英語担当者部会発足

- ・拠点事業の中心組織として毎月定期開催
- ・奈良市立学校共有フォルダの校務パソコンでの使用で会議時間の短縮化

#### ② 小学1年生～中学3年生まで9年間を見据えたCan-Doリスト素案を作成

- ・「目指す子ども像」(ゴール)を共通認識
- ・Can-Doリストを意識した授業デザイン

右京小・神功小の英語担当者と3名で毎月英語部会を開催し、9年間を見据えたCan-Doリスト素案を協働して作成した。Can-Doリストとは「～ができる」という形でゴールを示したものであり、それぞれの段階に応じた指導を系統立てて行うことを目指している。

### (2) 平成27年度

#### ① 小学校において1・2年生で活動型、3～6年生で教科型の英語教育を開始

- ・「聞く」「話す」力育成に加え、「読む」「書く」に慣れ親しむための指導追加
- ・適切な評価方法の検討と教員間の評価基準統一のための合同研修を実施

#### ② 小学校担任主導の授業へ転換

- ・地域人材や中学校英語教員に代わり、学級担任が主導する英語教育への転換

#### ③ 中学校英語授業における教員及び生徒の英語使用率アップ

- ・授業における教員の英語使用率 50%程度→80%程度
- ・生徒が英語を使って相互的なやりとりをする活動の工夫

#### ④ Can-Doリスト素案を基にした授業展開の試行

小学校において1・2年生で活動型授業、3～6年生で教科型の英語授業を開始し、学級担任が主導する英語教育への転換・推進を図った。そのために小学校学級担任の英語指導力強化が喫緊の課題となり、小学校の拠点校事業担当者とともに授業に入り込み、授業者に必要なサポートを行った。また、各校の英語担当者を増員

し、課題の共有や指導案の作成等授業の直接的なサポートと、教員を生徒に見立てて模擬授業をし、授業で即活用できるアクティビティを紹介するなど、授業者への研修の企画・実施を行った。

### (3) 平成28年度

① 小学校でモジュール授業（Eタイム）の開始

② 児童・生徒版C a n - D oリスト使用開始

担当者部会を定期的を開催し、C a n - D oリストが実態に即しているか検証・見直しを進めている。また、児童生徒用のC a n - D oリストも作成し、予め子どもたちに提示することで、見通しをもって学習させることができる。さらに、学期末にリストを使って学習者自らが学習を振り返り、具体的に達成度を確認し、次の目標につなげることができる。また、中学校英語の学習内容から小学校で早期導入できる内容を検討し、その分中学校で高度化できる内容があるのか研究を進めている。講義中心であった授業から、コミュニケーション活動に重点を置き、ペアワーク・グループワークを設定し、相互にやり取りをする力の育成に向け授業改善を図っている。



## 2 成果及び課題

成果としては、まず第1に小中の垣根を越えていつでも相談しやすい職員の関係づくりができたことである。第2に、教員の意識の改革ができたことである。事業初年度の平成26年度から英語担当者が率先して研修に参加し、伝達することで、生徒の学習環境の変化だけでなく、英語教育に携わる教員一人一人の姿勢も変化し、校区全体の意識改革につながってきたのではないかと感じている。中学校では今まで「教科書を教える」ことにとらわれがちであったが、C a n - D oリストを意識した授業をデザインすることで「教科書で教える」ことにつながった。

この取組を通して、英語は必要であると肯定的に捉え、英検やコンテストに挑戦したり、生き生きと英語でのコミュニケーションを楽しむ子どもが増えた。適切なパフォーマンス課題の設定や評価等、取り組むべき課題は山積しているが、今後も小中で連携しながら英語教育の改善を続けていきたい。

## 3 その他参考となる事項

本校区の英語教育強化地域拠点事業中間報告冊子

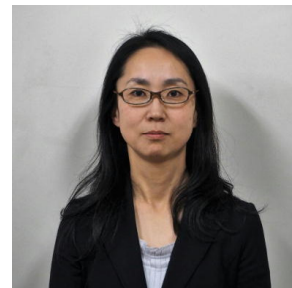
## 分野番号 5 中学校 特別支援教育の部

### 特別支援学級の入級生に対する入学時の対応と授業実践と通常学級における特別な教育的ニーズをもつ生徒・保護者への対応について

大和郡山市立郡山南中学校 教諭 増田 薫

#### 1 実践内容

私は、これまで教員生活の半分以上を障害児教育・特別支援教育に携わってきた。平成23年から3年間、交流人事として奈良県立西和養護学校で勤務の機会を得、地域に戻ってきた。その中で、中学校の教職員や保護者の方への特別支援教育への理解や認識を広め、実践につなげていきたいと考えていた。



本校では3年前から7月中に校区の小学校の保護者に対して、本校の特別支援学級であるなかよし学級の見学会・説明会を行っている。保護者、時には児童本人も一緒に、本校全体の見学、なかよし学級での学習の見学、授業の取り出しや入り込みへの対応の仕方や、中学校卒業後の進路についても説明をしている。3学期には、本校の特別支援学級に入級が決定した児童の保護者との個別懇談、小学校の担任との懇談を行い、入り込みが必要な教科の有無、取り出し授業を行うことにおいては、学年相当の基本の学習を行うか、下学年相当の本人に合わせた学習を行うかを本人・保護者の同意を基に決定している。それを基に教務主任とともに教育課程を作成している。

生活の時間（自立活動を中心とした合科学習）では、作品の制作などで手指の巧緻性を高めるとともに、好ましい人間関係を構築できるように作業学習を中心に取り組んでいる。

絵を描いたり、作品を作ることにに関して消極的な生徒が多いため、スモールステップで自分のペースで制作していけるように設定している。この2年間で、ペーパークイリングやゼンタングルなど各生徒に合わせた活動で作品を作成した。ゼンタングルとは「かんたんなパターンを繰り返し描くだけで、誰でも美しいアートを楽しむことができるメソッドで、年齢やアートの知識、経験はまったく必要ありません。呼吸を整え気持ちをリラックスさせ、心のままに描くうちにイメージができあがっていく行程を楽しむものです。」と説明しており、自分の好きな図柄を選び、自分のペースで仕上げる事ができた。ペーパークイリングでは、身近にある材料を使って自分の好きな色を選び、作品に仕上げた。合同作品として校内の文化祭や市の作品展に出品するなど、生徒の頑張りを認めてもらえる場面作りを心掛けている。

もう一つ、感謝される経験、責任をもって仕事をする経験を積ませるため、各クラスへの配布プリントの枚数を数えるなどの仕事を校内の教員から任されるようにしている。この作業は正確に数えること、「できました」の報告をすることや指示が分からない時に教員に尋ねること、完成した仕事を届ける時の話し方など、活動の中に好ましいコミュニケーションを学ぶ大切な機会にもなっている。



「なかよしフォース」(ペーパークイリング作品)

本校でも通常学級在籍生徒の中に、特別な教育的ニーズをもっている生徒、医療機関などで検査を受け知的グレーゾーンや認知の偏り、あるいは発達障害の診断を受けている生徒が多くいる。4月の家庭訪問終了時と7月の三者懇談終了時には、保護者からの申し出や日々の授業や活動の中で感じる特別支援教育の面から気になる生徒の情報を各担任に提出してもらい、全職員で情報共有をする機会を設けている。そこから、特別支援教育巡回アドバイザーの先生に来校いただいて、生徒の支援について助言頂いたり、必要に応じて特別支援教育コーディネーターとして個別に懇談を行っている。その例と



「なかよしゼンタングル」(作品の一部)

として、通常学級の生徒で保護者の低学力への心配が強いことから懇談を行い、検査を受けたいとの保護者の思いを聞き、教育研究所特別支援教育部で検査を受け、保護者・担任とともに教育相談に行き、本人への支援の方法を話し合った事例や、通常学級在籍ではあるが、療育手帳の取得をし高等養護学校への進学も視野に入れている生徒に対して担任と連携をしながら、支援をした事例がある。

## 2 成果及び課題

就学指導委員会への申請の前に、中学校からの入級を考えている保護者とも見学会・説明会、個人懇談を行うことで、中学校生活や高校進学への漠然とした不安感をもっている保護者には安心感を感じてもらえ、それは生徒の安心感や安定につながる。そして、教職員で入級生の入学前に、その生徒の様子や保護者の願いを共通理解できていることは受け入れる側としても安心である。慌ただしい中ではあるが、入学式の後に交流学級担任・学年主任と本人・保護者と共になかよし学級で顔合わせをして、家庭訪問までの数週間の不安感を取り除けるようにしている。

生活の時間の取組では、人に伝えることを実践することで、生徒は少しずつコミュニケーション力を付けてきた。そして感謝される実感や必要とされる存在であるという実感を感じ、自己有用感をもてる生徒も増えてきた。一方で、今年度からいわゆる「障害者差別解消法」が施行され、学校教育の中でも合理的配慮と基礎的環境整備が求められるようになった。合理的配慮の正しい理解と実践を教職員全体に伝える必要がある。障害児教育から特別支援教育と変わり、特別支援学級に入級していても障害受容ができていない本人・保護者もいる。とくに、その場合には教員が必要であると判断した支援をどのように提示し、理解を得ていくか、個別の教育支援計画に取り入れていくかは、その時々判断になり、管理職・教職員全体の理解と協力が欠かせない。教職員全体で生徒を支えることができるように、自分自身の力量を高めるように研修を重ね、研鑽に励むとともに、学校としての体制づくりにもさらに力を注いで行きたい。

## 3 その他参考となる事項

ゼンタングル (ペン1本で誰でも描けるパターンアート)

発行所 株式会社ブティック社

## 1 実践内容

機械研究部では、「地域連携」を重点に、様々な活動を通して、技術指導に関する支援者の輪を広げ、生徒の専門性を更に向上させるとともに、地域住民とのふれあいの中で生徒の情操を育てている。その結果、各種検定や大会で成果をあげ、学校全体の教育活動に活気を与えている。



### (1) 専門性の更なる向上

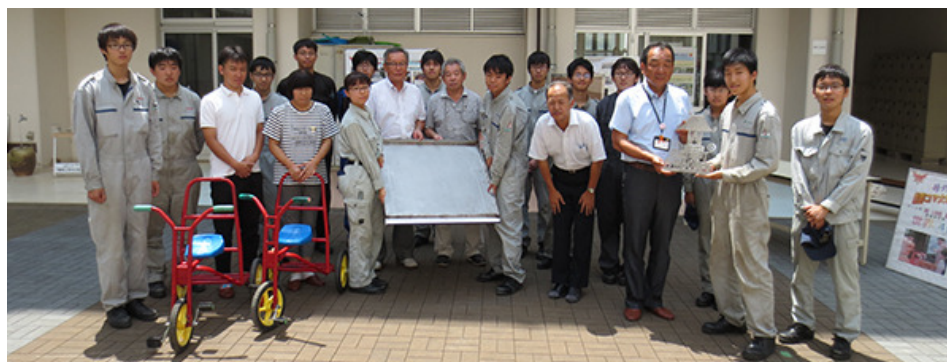
平成20年度より、奈良県職業能力開発協会及びものづくりマイスターにおける機械加工分野の専門家と連携し、地域の専門技術者を機械研究部の活動に招き、旋盤加工におけるより高度な技能を指導していただいている。特に、県内で「からくり独楽」の研究をしている技術者から、精度の高い加工法を伝授してもらい、10分以上回転し続けるコマを製作した。そのコマでプロの技術者も参加する全日本製造業コマ大戦近畿大会（平成26年5月大阪開催）に出場し、出場34チーム（高校3チーム）の中で準優勝（高校チーム最高順位）を果たし、世界大会への切符を獲得した。

全日本製造業世界コマ大戦（平成27年2月横浜開催）では、出場30チーム（高校2チーム）で、世界第4位まで勝ち残り、高校チームの中ではトップの成績を収め、金属加工のプロを相手に大健闘した。この取組はNHKや毎日放送のテレビ番組にも取り上げられ、本校の広報活動や活性化にも貢献した。



### (2) 地域貢献・情操の向上

数年前より、「都跡ふれあいまつり」や「田原本町やどかり市」等のイベントに参加している。「田原本町やどかり市」では、機械研究部で製作したシャボン玉発生器で駅前商店街の雰囲気を盛り上げたり、綿菓子製造機やポップコーン製造機等を製作したりするなど、子どもたちや地域の方々とのふれあいを通して、生徒の情操を育む活動を行っている。その結果、生徒の提案でポップコーンの売上金をいち早く熊本大震災復興基金に寄付し、



そのことが新聞紙面にも大きく取り上げられるなど、社会貢献の面でも教育効果をあげている。また、自治会から依頼された模擬店用大型鉄板の製作や特別支援学校から依頼された三輪車の修理、近隣高等学校の校門の修理等、様々な活動も行っている。日々の技能向上に向けた取組の成果を発揮することで、地域の方々に喜ばれ、つながっていくことが活動の原動力となっている。

### (3) 技能検定取得者の育成

機械研究部の技術力向上に伴い、3年前は6名であった技能検定取得者が、現在では部員16名のうち1年生5名を除く11名全員に増えた。それを機械研究部以外の生徒へ拡大するため、検定取得した機械研究部の部員に実技指導の補助をさせるなど、効果的な指導方法を工夫したり、検定合格者の名前を全校生徒に示したりすることで検定に対する意識を向上させ、機械工学科全体（2クラス×3学年）で100名を超える検定取得者を輩出することができた。

そのような中で、平成26年には機械研究部の卒業生がフライス盤作業で企業から技能五輪本選に出場し、平成28年8月には機械研究部ではないが、卒業生が旋盤作業で11月に開催される技能五輪本選出場が決まるなど成果を収めている。

## 2 成果及び課題

学校内では、機械研究部の生徒が、3年前の6名から現在の16名に増え、専門的技能が向上すると各種活動に積極的に参加するようになり教育活動も活性化してきた。その結果、工業系学科では、検定取得者が、各クラス3～4名程度であったのが、各クラス20名程度まで増加してきた。商業系学科でも全商一級や日商二級等の上位級の合格者が前年度比13%増の101名と増加した。また、各種技能コンテストに参加したり、各種技能検定に挑戦することで、専門的技能を一層高め、平成28年度に「奈良県溶接競技会高校生の部」で会長賞、「全国高校生ものづくり大会旋盤の部奈良県予選」で1位を受賞した。技能コンテストでの受賞や検定取得で自信をつかみ、その技能を生かして地域の依頼に応えることで、自己有用感を育み、自尊心の向上にもつながっている。

学校外でも、地域の行事に物心両面で参画することで、高い評価をいただいております。平成28年度も多数の参加の依頼を各方面からいただいている。地域の専門家の方々も、次世代を担う技術者育成の観点から、継続して技術指導に取り組みたいとの評価も得ている。さらに、溶接や機械加工に関して、インターシップでお世話になるなど、地域から学校教育に対する協力者も増えてきている。

今後は、企業間連携も視野に入れ、奈良県職業能力開発協会が現在行っている、「ものづくりマイスターの派遣制度」のみならず、さらに本校を支援していただける企業や人材を増やしていく方策を、学校規模で考え、実践していくことが課題であると考えている。

## 3 その他参考となる事項

奈良県立奈良朱雀高等学校ホームページ <http://www.nps.ed.jp/ns-hs/club/kikai/index.html>

## 1 実践内容

本校は、農業系学科と工業系学科を有する専門高校で114年の歴史と伝統をもつ学校であり、長年地域産業の担い手育成に努めてきたが、地域産業の衰退や吉野町の少子高齢化の影響で、地元地域からの入学者が減少傾向にあることが大きな課題である。本校には、将来に対し様々な期待や不安をもつ多様な生徒が少なくなく、これまでの家庭生活や学校生活において、成功体験や達成感を得た経験が少ない生徒や、他者とコミュニケーションを図ることが苦手な生徒も含まれている。このような状況の中、森林科学科の教員として、日々の学習活動を通じて専門教科に対し興味・関心を抱かせると共に、奈良県の地場産業であり、吉野町の主産業である林材業に興味をもたせ、次世代の担い手を育成できるよう努めている。生徒と共に取り組んでいる活動の実践報告及び地域との連携について報告する。



### (1) 「よしの調査隊」の結成

平成26年4月に森林科学科2年生2名が選択履修した「課題研究」の授業で”地域の情報発信”をテーマとして設定した。そこで、当該科目指導者の私と生徒2名で地域の魅力を掘り起こすための活動組織を立ち上げ、「よしの調査隊」と命名、森林科学科の生徒が参加する農業クラブ活動の一環としてスタートさせた。活動内容の基本は、吉野地域で木材の加工や利用に関わる方々を生徒自らが取材し、その様子をWebページやSNS、動画配信を活用して町内外の方々に発信し、少しでも多くの方々に地域の魅力を伝えていくことであった。現在配信している動画は総数25本になっている。私はこの活動を通じて、生徒が地域産業の現状やそこに携わる方々の思いを知り、地域の方々とコミュニケーションを図ることで地域理解を深めるとともに、生徒個々の自己啓発につながることを期待した。また、一過性の活動ではなく、多様なメディアを利用しながら継続的に活動し、生徒自らが思考を広げていくという経験を通して、多くの学びが生まれることを意図して指導に当たった。



活動2年目には生徒が4名になり、取材がきっかけで、製箸業者と新たな「文様割箸」を共同開発した。森林科学科の生徒がレーザー加工機を使い、文様を割り箸の表面に彫刻し、吉野特産の杉割り箸の付加価値を高めて全国にアピールしようとした。この活動の輪は、吉野町や広告代理店にも広がり、産官学が協働する「文様割箸」プロジェクトとなった、そして、この付加価値のある割り箸は、地域の活性化につなが

### (2) 地域との協働の広がり

活動2年目には生徒が4名になり、取材がきっかけで、製箸業者と新たな「文様割箸」を共同開発した。森林科学科の生徒がレーザー加工機を使い、文様を割り箸の表面に彫刻し、吉野特産の杉割り箸の付加価値を高めて全国にアピールしようとした。この活動の輪は、吉野町や広告代理店にも広がり、産官学が協働する「文様割箸」プロジェクトとなった、そして、この付加価値のある割り箸は、地域の活性化につなが

る取組とデザイン性が評価され、2015グッドデザイン賞を受賞した。また、内閣府が実施した「まち・ひと・しごと創生あなたのまちの地方創生動画」にも動画を応募し、現在3本の動画が公開されている。これらの活動が認められ、地域の魅力を発信する「よしの調査隊」の活動は吉野町公認となり、吉野町が実施した地域メディアプロデューサー養成講座に「よしの調査隊」のメンバーも参加し、地域メディアプロデューサーとして活躍している。



## 2 成果及び課題

「よしの調査隊」は本年度11名となった。そして、情報発信活動だけでなく、地域イベントで運営ボランティアとして参加するなど、活動をより高次のものへと広げようとしている。今年度は、奈良県南部東部振興課の「ふるさとへの愛着心事業」に協力し、吉野町国栖地域で続く「国栖の里灯り展」で中学生の灯り展をプロデュースした。また、ステージイベントを企画・運営し、地元中学生が活躍する場をコーディネートし、無事に実施することができた。さらに、奈良県が主催する、奈良のPRや魅力向上に寄与した個人または団体を表彰する「あしたのなら表彰」の特別賞を受賞した。現在では、一般のテレビ局や地元ケーブルテレビ、新聞社等から逆に取材の依頼が増え、注目を浴びることで、生徒の中には今まで以上に前向きな姿勢が見られ少しでも地域のために貢献しようとする意識の高まりが感じられる。次年度には、生徒発案の企画「復活・筏プロジェクト」をスタートする予定で地域の方々と事前の準備を進めている。

これからも積極的に活動を継続し、地域とのつながりを広め、少しでも地域に貢献し、生徒により多くの経験を通して、成功体験や達成感を得て自信をもたせるとともに、地域理解やふるさとへの愛着心を高められるよう取り組みたいと考えている。

## 3 その他参考になる事項

よしの調査隊YouTubeチャンネル

<https://www.youtube.com/c/よしの調査隊>

よしの調査隊Facebookページ

<https://www.facebook.com/yoshinotyousatai>



YouTube



Facebook